

相馬高校・新地高校学習支援プログラム

文責：猿谷洋樹
(松井ゼミ ゼミ長)

(概要)

東日本大震災および福島第一原子力発電所事故の発生以来、相双地区（相馬郡・双葉郡）は物理的被害に加えて住民の流出に悩んでいる。本企画は、地域の復興を担う若手人材の育成を目的として、これまでも松井教授とゼミ生の有志によって数回にわたり実施してきた福島県立相馬高等学校の生徒を対象とした学習支援プログラムを、同教授のゼミ全体での活動に拡大して実施したものである。

(内容)

開催日時：平成 24 年 9 月 28 日（金）— 30 日（日）

場所：福島県立相馬高等学校

参加者：松井彰彦（東京大学経済学部教授）、東大生 40 名、
相馬高校生および新地高校生 25 名

具体的には、

1. 高校生に、ゼミ生の有志が企画した経済実験に被験者として参加してもらうことやゼミ生の一部による研究発表会に参加してもらうことを通して大学における学問に対する興味関心を深めてもらう。
2. ゼミ生を相談員とする学習・進路相談会に参加して勉強や学校生活から進路まで多岐にわたる悩みの解決・進路選択に役立ててもらおう。
3. 松井教授やゼミ生を相手とするスポーツ活動に取り組むことによって大学生という存在を身近に感じてもらう。

これらのことを目的に据えて活動した。2 および 3 の活動は、同県立新地高等学校の生徒（有志）も招待して実施した。

高校生の実験やサッカーに熱心に取り組む姿や進路相談会において自身の将来の展望に関して真剣に相談する姿からは、やがて復興を支える貴重な人材となる大きな可能性が感じられた。今回初めて東大生との交流に参加した高校生も多く、このような活動を知ってもらうことで今後の高校・大学間の相互交流の促進につながる事が期待される。本年度に 7 回にわたり実施してきた学習支援プログラムでは、回を重ねるにつれて高校生から「東大生のイメージが変わった・東大生との距離が縮まった」「自

分の現状や悩みを具体的に東大生に話せるようになった」「勉強意欲が高まった」といった感想が次第に聞かれるようになったが、このことを考えると、今後も継続的に交流を行い、その中で東大生との心理的距離を縮めていくことが高校生の学習や部活、生活全般に対する意欲を高め、本プログラムをより一層実りのあるものにすると考えられる。

また、ゼミ生も本プログラムや学習支援プログラムを通して初めて相馬市を訪れる機会を持った学生が大半であった。「福島県が抽象的な場所（震災の被害地域）から顔の見える地域に変わった」「磨けば光る『ダイヤモンドの原石（相高先生談）』という表現がぴったりの高校生に会えた」といった感想が東大生の口々から聞かれたことに見られるように、被災地の現状を肌で感じる・高校生と交流を行うといった経験が東大生側の視野を広げ、成長に寄与し、一層の支援活動へのコミットにつながっている。本プログラムではゼミ生のほぼ全員が支援活動に携わりこのような経験を共有することができ、ゼミ全体としてこうした活動へのコミット意欲が高まったように感じられた。今後もますます多くのゼミ生が支援活動に参加・貢献していくことが期待される。



有志で企画した経済実験「クールノー競争ゲーム」の実施風景。高校生にも被験者として参加してもらいました。



熱心に取り組む高校生。
実験の進行はゼミ生や被験者の高校生に委ねられ、松井教授はじっと見守っています。



高校生とのサッカー交流。大学生がへとへとになる中で、高校生は非常に元気でした。(松井教授も参加)



左：相馬高校 校門前
平成 25 年 3 月 1 日開催の
福島県立相馬高等学校卒業証書
授与式に参列しました。

下：卒業を喜ぶ相馬高校
3 年 6 組の皆さんと記念写真。
卒業おめでとう！
これからも頑張ってくださいね。
前から 2 列目中央が「学習支援
プログラム」のメンバーです。



前列左から、松井彰彦教授（東京大学大学院経済学研究科）、松村茂郎先生（相馬高校教諭・
3 年 6 組担任）、藤井健志先生（代々木ゼミナール・講師）です。
ご尽力ありがとうございました。